「方言」が拓く地域力（シンポジウム報告）

文学部国際言語・文化学科
教授　松田　美香

1 シンポジウムのねらいと経緯

日本の全体的な人口の都市部集中、少子高齢化、貧困者の増加などが問題視されているが、すべてに共通するのは「地方の力の弱化」ではないだろうか。地域力の見直し・向上活動が必須であるという背景から、方言学での取り組みも地域力向上につながることを示し、より良く研究・活動するための意見を広く求めたいと考えた。

具体的には、報告者の長年にわたっての研究協力者数名にこれまでの研究の成果を発表してもらうこと、報告者は科研費研究の中間報告を行うことを考えた。そして、「方言から見える地域力とは何か？」「方言による地域力向上は可能か？」という疑問・反論に答えたいと思い、シンポジウム形式を着想した。

特に若者にも参加してほしいという点で、単発の学内シンポジウムでは限界があると予想されたので、飯沼賢司文学部長に相談し、後期の公開講座「九州学」内の１回として実施させてもらうことになった。また、篠藤明徳地域社会研究センター長にお願いし、地域社会研究センターに後援と指定討論者を要請した。指定討論者はセンター員の西村靖史人間関係学科長が快諾してくださり、シンポジウムを平成28年12月10日に実施できることになった。

③ 報告２ 方言記録の力

発表者　杉村 孝夫
（福岡教育大学名誉教授）

「方言で伝えるものには力がある」という主張を、「３つの震災と伝える活動」と「戦争体験を伝える活動」の両面から紹介した。

まず、阪神・淡路大震災をきっかけに、外国人被災者のための『やさしい日本語』作成の取り組みが始まった。さらに東日本大震災後、方言を被災者支援のために役立てようと作成されたパンフレットや会話集、方言記録CDなど、東北や関東各県の大学や文化庁の取り組みを写真で紹介した。さらに昨年起きた熊本・大分震災に際して、方言研究者の連携によって作られた簡易方言集や身体方言語彙の一覧図表などを紹介し、支援者が方言を理解することで、一刻も早く被災者を救援できる力が方言にもあることを述べた。

第２に、「戦争体験を伝える活動」として、風船爆弾について伝える福岡県八女市の紙芝居の紹介や、学生の祖母が、福岡県大牟田市で３歳の時に空襲に遭ったが、母親が覆いかぶさって自分の命を助けたために死んでしまったという話を録音したもの（オーラルヒストリー）を会場に流した。

> お母さんはばあちゃんの耳元でうめきよんさったわけ。苦しいから。うーんと、うーーん、うーーーんっちゅうてからずっとうめきよんさったわけ。

話し手はその後佐賀市に移り住んだため佐賀の方言で語っており、「これを聞くと、非常に深い感銘を受ける。語りの内容が、身近に体験しているかのように迫ってくる」のは、方言だからこそではないかと会場に問いかけた。

④ 報告３ 方言を生かした表現
～「方言グッズ」など～

発表者　日高 貢一郎
（大分大学名誉教授）

旅行の際に、お土産として私たちが望むものは何だろうか。それは「その土地ならではの物」である。方言は、「その土地ならではの物」であり、お土産の「名前の付け方、包装の仕方や包装紙のデザインも、工夫によってより印象的なものになる点で、方言の活用が期待される」という主張であった。方言を生かした表現として、「うどん県」と名乗った香川県や「おんせん県」と名乗った大分県の例など、自治体や公的機関なども方言を活用することが多くなった最近の傾向を示しながら、方言のネーミングは「共通語とは異なったインパクトがあり、ちょっとミステリアスな存在」である点が好まれているのだろうと分析した。

方言に関連する「方言グッズ」は日高氏の命名であり、三省堂のHP上で紹介されている（稿末）。この方言研究者による数名のリレー連載には、全国約1500の事例が掲載されている。大分方言の事例を挙げると、「（杵築市）大田村の方言による交通安全看板」（第８回）で「事故ゼロ一万日をめざしちょる村じゃきな」など、豊後高田市の「大分方言まるだし弁論大会」（第73回）ではユーモラスな方言まるだしの弁論が人気で32回も続いていること、フットサルチーム「バサジィ大分」は「ばされー」〔たいそう、非常に、すごい〕と「サジー」〔敏捷な、俊敏な〕を組み合わせ、さらに「関サバ」「関アジ」の音も入れ込んだ、方言絡みのネーミングである（第123回）他多数。同HP上には、東日本大震災に関連する方言での応援看板なども数多く紹介されている。中でも宮城県石巻市の「おらほのラジオ体操」は全国的に有名になった方言でのラジオ体操であり、現在でもYoutubeで視聴することができ、会場でも上映された。

締めくくりとして、今後もユーモラスで強いインパクトを与えることができる、方言を生かした表現が活躍する機会は多いと予想した。

5 報告４ 方言談話から見えるコミュニケーション力

発表者　**松田 美香**
（報告者）

大分方言の談話録音資料は、約60年前から残っている。2015～2017年度、報告者が代表を務める科研費調査研究では、方言談話における対人配慮方法の解明を目的に、大分市と竹田市で調査を行った。本発表はこの調査の中間報告として行った。

調査研究のねらいは「働きかけ」のある言語行動の対人配慮要素を比較し、地域差・世代差・性差を見ることである。「依頼」や「申し出」など、同じ設定を与えて設定以外は自由に話してもらう形の調査から、以下のような傾向がつかめた。

①３世代を比較すると、自己の心情を語る言葉や話し相手に対する配慮の言葉の使用は、中学生と大学生の間に断絶があるようだ。

・大分市高年　男Ａ×男Ｂ（「申し出」を受けて）
男Ａ　イツモ　ソゲーシチモローチ　ワリーナ《心情説明》、アマエチカラ　タス…　エーカワッチモローチェ《心情説明》、ハーイスイマセン《謝罪》、アリガトーゴザイマシタ《謝辞》

・大分市大学生　男Ａ×男Ｂ（同じ場面）
男Ａ　アーアア　ウ　アリガト《謝辞》、アーヤッタ《心情説明》、ア　ダイジョーブ《応答の反復》、ン　ア　ジャー　コンド　オレノホーカラ　アノー　ブジ　アノ　テンチョーニイ　イットクカラ《行動の意思》

・大分市中学生　男Ａ×男Ｂ（同じ場面）
男Ａ　アリガトー《謝辞》、ハイ　バイバーイ《挨拶・儀礼》

②高年層は、話中に「アンタ」を盛んに差しはさむことで、相手に話し手の積極性を伝えている。このような「アンタ」は、若い世代には伝わっていない。

③若い世代が盛んに使っている「マジデ・マジカ」は、「本当に？」という驚きを含んだ確認の語であり、語としても談話中の機能としても特に新しさがあるわけではない。短くて便利な点が良いが、表現の単一化傾向が見られる。

・大分市大学生　女Ａ×男Ｂ
男Ｂ　ウン　カワリニ　オレガ　ハイルケン
（うん　替わりに　俺が　入るから。）
女Ａ　アッ　マジカ↓
（あ、　マジか？）

高年層や大学生が《心情説明》他いくつもの機能的要素を織り交ぜながら話すのに対し、中学生は種類も少なく短い。上の世代の表現の豊かさを学ぶべきだと主張した。

6 報告５ 指定討論者とのやりとり

指定討論者　**西村 靖史**
（別府大学教授）

西村氏からは、発表者一人ずつに質問がなされた。二階堂氏は「あーね」の語源や性差を尋ねられ、「語源は正直わからない。女子だけに限られる言葉ではない。」と答えた。杉村氏は他地方の方言であっても聞き手が深い感銘を受ける理由を問われ、「よそいきの言葉でなく自分の言葉で話しているからだろう。」と答えた。日高氏は今まで調べた方言グッズの中で最もすごいと思うものとその理由を問われたが、「もう少し考えさせてほしい。それぞれに知恵を絞った力作だ。」と答えた。報告者は「中学生の言葉が貧弱なのは人間としての内面未成熟と社会的未発達のどちらと思うか」と問われ、「おもに社会的未発達が原因。今後ますます生活環境の個別化が進み、大人の会話を耳にしないで育つことが心配。」と答えた。最後に西村氏から、今後の方言研究と地域とのつながりや展開を問われ、報告者は「おもしろく使いやすい方言教材の開発」、日高氏は「自身のHPが商品開発のヒントになるのでは」と答えた。

7 報告6 フロアーとのやりとり

司会　清水 勇吉
（宮崎国際大学講師）

最後に、フロアーから質疑を受けた。学生からの「若者の『あーね』のように若者に広がっていく方言と衰退していく方言との違いはどこにあるか」という質問には、二階堂氏が「残念ながら状況証拠で言えるだけ」と答えた。一般からは「野津町の吉四六さんを小学生が演じている活動についてどう思うか」、「マジデとかウソーとかは、いつ頃から言い始めたのか」という質問があった。吉四六さんの伝承活動については、杉村氏が「今後も楽しみながら語り継いでほしい」と答えた。清水氏がフロアーで挙手してもらった結果、「マジデ」や「ウソー」は参加学生たちが物心つく前から使用していることがわかった。

8 当日アンケートから

授業によって参加したのは94名、市報や関係者からの案内で参加したのは12名の計106名から回答を得た。今回、「方言に対する考え方が変わった」と回答した40名に、「どのような変化がありましたか」と自由記述をお願いした。以下、いくつか代表的なものを抜粋する。

「方言は聞きにくいものだと思ったけど、実際にあった体験や戦争の話は方言で話されると重みのあるものだと感じた。」（授業受講者）、「方言というのは古臭く、話しているのは恥ずかしい言葉だという認識だったが、力があり、今までの印象がガラっと変わりました。」（授業受講者）、「これまで方言が新たに形成されている事象があることの認識はなかった。若者は方言を使わないと思っていた。」（一般参加者）

次に本シンポジウムの意見感想を尋ねた。「『あーね』が福岡発祥だとしても年が経って確実に広まっていくことに福岡という地域の力を感じました。」（授業受講者）、「方言で戦争体験を語っている女性の音源をきくと、他人事ではないなというふうに感じて、次の世代に伝わることができるなと思った。」（授業受講者）、「『方言を生かした表現』私のような一般人には興味深く受け取れました。地域社会、日常生活の中で発見する喜びを見出したいと思いました。」（一般参加者）、「４人の異った立場からの角度のちがった方言研究発表がそれぞれに興味深かった。若者の方言へのアプローチに初めて接した。」（一般参加者）など。

「今後期待するもの」も尋ねた。「地元が方言を知り、誇りに出来るくらいに方言を理解をしたい。」（一般参加者）、「各地の方言集を作ることも必要、すでに作られてはいるが、組織的な収集が必要。」（一般参加者）、「自分の県のまだ知らない方言をしゃべってみたいと思った。」（授業受講者）、「大分県には多くの方言がその地域に分れて話されているので、それも研究してもらいたい。」（一般参加者）、「方言をよく使う高年者と、若者を集めて談話会」（授業参加者）、「方言で話す戦争体験の人の話をもっともっと聞きたいので、その機会を増やしてほしい。」（授業参加者）、「一日も早く避難所での『方言集』を作成して頂きたい。」（一般参加者）、「SNSと方言のかかわり～方言はSNSでどう生き残るのか」（一般参加者）、「世界規模のアピールを行えるようになれば、さらに良くなると思う。」（授業参加者）など、数多くのアイデアや要望を受け取った。

<参考>三省堂 Webサイト
「地域語の経済と社会～方言みやげ・グッズとその周辺～」http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/hidaka/